御薬 甘草(おんやく かんぞう)

好枝

甲斐の国へ（前編）　　平栗好枝

序章

宝永（一七〇四）八年、飛騨を出たのは陰暦一月。
誰にも知られず村を出た。
飛騨から美濃へ抜け、三河・遠江・駿河路などの街道を夢中で走り抜けた魁は、相模の国の鶴岡八幡宮の、鳥居の前に立つことができた。

「やっと観ることができたぞ」
　鎌倉武士の守護神だ。
山の上に建つ僧堂を見上げた。
　石段の左側に大きな銀杏の大木があるが、冬枯れの小枝が真っ直ぐ天を指して伸びている。
魁にしてみれば、関東に入った確認としていた所でもあり、間違いなく目的地に近づいている。という自信と安心感を持てたからである。

鶴岡八幡宮は、前九年合戦（一〇五七）の頃、源頼義が勧請し、後に頼朝が鎌倉幕府成立（一一八〇）に伴い、源氏の産土神として鎌倉の中心地に移したのである。
飛騨を出る時、頭領市蔵から相模の海岸近くにある、この有名な寺社のことを聞かされ
「道中の無事を祈るのだ」
　と言われていた。境内は広く人影はまばらだった。彫刻のある神殿の前で、これからの旅の平穏を心静かに祈り、はやる心を抑え石段を駆け上がった。
社殿に掲げてある大きな扁額に、八幡宮の文字が見えるが八の字は、鳩が二羽向き合って書かれている。社は鬱蒼とした木々に囲まれ、鎮護の役目を果たすように悠然とそして尊大に座していた。ここでも魁はあらためて祈った。
再び身を翻がえし、海の風に逆らうように歩きだした。

「空、今夜はどこで寝ようか」
日の落ち具合からそろそろ八つ（午後二時半）に近い。
　市蔵から与えられた路銀は残り少なくなっていた。
　まだ乱世を抜け出せず統一した通貨は不安定で、一定の貨幣鋳造所もなかったから、魁などは金や銀の小粒を小袋に入れて渡されていた。
籠の中からまだ小さな小猿が顔をだした。
　くー　と鳴いて、小猿は魁の首に片手を回し、魁の顔に自分の顔をすりつけた。
「お前にいってもわからないよな。また寺の境内にでも寝るか」

　小猿の空は、村にいる時、滝のそばでかすかに鳴き叫んでいるところを、たまたま通りかかった魁が見つけたのである。生まれて間もないのか全身の毛はしっとりとしていた。

しかし、付近に猿の集団は見当たらない。どうして落ちていたのかわからなかったが、とにかく連れ帰り手厚く保護した。
　猿は春、緑の季節になる頃出産期を迎える。
　まさにその時期だった。小猿は握力が強く、母親猿のお腹にしがみついて成長するのだが、それを魁に求めかじりついて離れない。猿は一年以内の死亡率が高いというが、空は魁の育て方が上手かったのか、すくすくと育った。
　猿の集団を見かけるとその中に入れ、自然に還そうと試みたが、それはもはや無理なことがわかり、以来いつも一緒だった。
　一年がたち空はかなりしっかりとした猿になっていた。
　魁が空とたわむれていてよそ見をしていた一瞬、ふいに横合いから三人ばかりの男が飛び出し、中の一人がわざと魁に体をぶつけ、
「どこ見てんだよ。あっ痛ってえ。腹にぶつけやがった」
「お前どこからきたんだよ。汚ったねえ格好しやがってよ」
　魁は相手にせず黙って離れようとしたが、三人は行く手をはばんだ。
「よそ見したのは悪かった。謝るよ」と、下手に出た。
「ただ謝ってもだめだ。かたをつけてもらおうじゃねえか。金を出しな」
「あいにくだが金はない。こっちが貰いたいくらいだよ」
「何だと、ふざけやがってよ」
　そう言うといきなり一番大きなのが魁に飛び掛かってきた。自信があるらしい。だがその瞬間大きいのは魁の後ろに五尺（一五二センチくらい）ほど飛んでいた。起き上がれずもがいている。
「やりやがったな。なめるなよ」
次は小柄だが、浅黒い絞まった体の男が、腰に差した一尺（三三センチ）ばかりの脇差しを抜き構えた。
　魁は背中の籠をそっと下ろしながら、小さな声で空に、じっとしていろよ、と言いながら端の方に置こうとした。その間もおかず、
イエーッ
　いきなり刃先が魁の腰あたりを狙ってきた。
危うく体を横に引くと小柄は、刀を持ったまま前にのめってしまった。
　小柄が起き上がるより先に三人目の、一番骨のありそうな頭に布切れを巻き付けたのが魁の顔面を
ホーヤーッ
　と奇妙な声を張り上げて、片足で蹴りあげようとした。
　しかしその瞬間、魁はその足首を右手で掴み、ねじ上げていた。布切れは片方の足が安定を

かき、
ウワーワー
と叫びながら後ろに大きな音を響かせながら、ひっくり返ってしまった。
「悪くおもわないでくれよ、お前たちがかってに引き起したんだからな。以後は汚い奴でも気をつけるんだな」

「空、終わったよ」
籠から不安げに小さな顔をのぞかせている空に、声をかけ籠を背負うと、さっさと歩きだした。
魁にとってはこの程度は軽いものであったが、初めての対外試合のようなもので、態勢の心構えができていない油断だった。あとには呻きながら地面に転がった三人が、魁の去っていく後ろ姿を呆然と見送っていた。
「飛騨の雪道も怖かったが、里に下り江戸に近くなるとどんな人間がいるかわからない。肝に銘じよう」
頭領の市蔵によくよく注意を受けてきたことを、魁は身をもって受け止め、増えてゆくだろう危険を思った。
鎌倉のあたりから海が間近に見られるようになった。
三河や駿河のあたりは山道を歩いたので、海からは離れていたのである。
「これが話に聞いていた海というものか。すごいものだな、どこまで続いているんだろう」
真砂を見るのも、海を見るのも初めてだし、海水が塩分を含んでいることも初めて知り、すべてが珍しかった。
魁は砂浜に籠を下ろし、
「空、出てこい」
と言い、籠を横にして空がでやすいようにした。
しばらく一人と一匹は砂の感触を楽しんだ。
籠は巾着型で竹を細く裂いて編んであり、大きさは縦横とも一尺ほどだ。上部は鹿の皮で紐が通してありとじるようになっている。内側と外側は柿の渋と漆が塗ってあり、少々の水分ははじく作りになっている。空はそんなところから器用に出入りするし、用便の時は魁の頭をつついた。
「さて今夜はどこで寝るか」
あたりを見回すと、近くに使っていない船が二艘ばかり砂浜に引き揚げられていた。中を覗くとうまいぐあいに、うす汚れたむしろが二枚ばかり放り込んである。
「上等な寝床だな。今夜はここに寝るとしよう」

日が暮れて陽も水面に落ちかかってきた。
漁に出ていた船が、近くの船寄場にぞくぞくと戻ってきていた。魚を焼いているのかかすかにいい匂いもただよってきた。
魁にとっては飛騨の川で魚、山では鳥やけものを捕っては焼いて食べたりした少し前までの記憶が蘇ってきた。

「うまそうな匂いだな」
　そう思っても知らない土地でうっかり人のそばには近づけない。木の実で我慢しようと思った。
　翌朝、まだ暗いうちに魁は籠を背負い歩きだした。
「空、ほら朝飯だ。とうぶん俺もお前も同じ食い物だな」
　口を動かしながら歩く。空は魁に自分の顔を近づけてきて朝のあいさつだ。
　品川宿という所に着いたのが四つあたりで（午前十時）日はかなり高くなっていた。江戸は近い。
 浜の前で小さな小屋掛けの「一膳めし」、とのぼりを立てた店が目にはいった。路銀は残り少ないが江戸の屋敷に着くのも間もなくだ。そろそろまともな物を食してみたい。
 後は何とかなるだろう。
「飯を食わせてもらえないか」
「金は持っているのか、食って逃げて行く奴が多いからな」
　ひげ面の太った主がそう言うと魁をじろりとみた。
　魁は袋の中の銀貨を少し出して見せると、
「前金で払ってくれ」
　と言って金を受け取るとすぐに、汚いお盆に大盛りの麦飯とわかめ汁と、これだけはすばらしく大きな魚の焼いたのをのせて魁の前に置いた。魁はご飯を小さく二つ握ると籠の中の空に与えた。主従は久し振りの食べ物に息を吹き返す思いだった。
　そのせいか魁は一気に走り、日が頭の上にのぼる頃、「日本橋」と書いてある橋の上に立っていた。

一

天正十八年に徳川家康が江戸城に入った頃(一五九〇)まわりほとんどが葦の生えた浜で低地の湿地（水田）帯であった。

江戸日本橋は慶長八年（１６０三）に初めて架けられ、欄干には擬宝珠がつき反りのある木橋だった。最初は丸太が架かっていたこの川は「堀川」ともいい、文字通り掘って水を通した運河のことで「二本の丸太を渡した」橋だから日本橋と名が付いたとも言われた。

川といえば自然河川である隅田川しかなく、この川も江戸湾のあたりでは大川と呼ばれていた。
上流から次第に橋が架かりはじめたが、武蔵の国と、下総の国をつなぐ両国橋が主要を極めた。江戸城を中心に徳川家直営の普請の結果、大小の河川もできはじめ、陸路より水路の整備が多く、まさに江戸は水郷地帯であった。埋め立てもかなり進んでいる江戸の町だが、かすかに潮の香りがただよっていた。

間口の広い商家が立ち並び、大勢の人々が行き来していてすごい活気だ。
「これが江戸の町か、さすが将軍様のお膝元だ」

野育ちの魁は気をのまれたようにしばらく眺めていた。

忍び者、としてはまことにうかつな気の緩みようだ。

飛騨から美濃あたりでは殆ど人になど会わなかった。ときおり出合うのは野ウサギや、鹿、猟師に追われる猪くらいのもので、関東に近づくにつれ行き交う人間は多くなってきた。それでもこんなにぎわいの風景には出会ったことはなかったのだ。

戸惑ったがひるんでいるわけにはゆかない。

腹を決めて歩きだした。

魁は飛騨を出る時、市蔵から江戸図なる地図を持たされていた。武家では表札を出すことは許されなかったから、誰かを訪問する時は地図が必需品だった。自分の位置を知るには町名、道路名だけが頼りだが、それがどこなのかが把握できない。薄汚れた衣類のせいか、うろんな目で見られながらとにかく方角を定め人ごみのなかへまぎれ込んだ。

市蔵はなおも自分の経験からなのか、
「江戸城は必ず見ておくこと」

それに大きな藩の屋敷が集まる威容を掴んでおくのも、後々役に立つだろう、と言うのだった。

時の将軍は徳川家宣だ。

家宣は、三代将軍家光の三男綱重の子としてうまれた。
父綱重は家光の子でありながら幼少期、家光の姉、千姫の元に養子に出され千姫の局に養育され

たが、局の侍女に手がつき家宣が生まれたのである。家宣もまた幼くして養子に出されていた。その後、甲府松平家の城主を二十六年間努めた後、五代将軍綱吉が死去した宝永六年（一七〇九）十二月、六代将軍となったのである。

家宣はまず、前将軍綱吉の悪法、「生類憐れみの令」を廃止し、その禁令から開放された万民から喝采をあびた。

家宣は在位わずか三年であったが、綱吉の遺言を守らず庶民の立場に立って物を考えたことは、それだけでも名君だったのではないだろうか。

幼い頃から他人の手で育てられ、苦労してきたせいか、下情にも通じ思慮深い性格でもあったという。

そんな将軍が統治する江戸に今、魁は居るのだった。

道順をしぼりながらも道草をし、かなりのことを知ることができた。物をたずねるのに苦労しながら、探す藩邸は江戸城寄りで近くに内藤新宿があることも分かった。幕閣の役職の地位によって城からの距離が違うのである。しかしあたりが薄暗くなり視界の先にあるのは、長い塀ばかりだった。山での暮らしなら、獣道でも間道の道でも魁は鑑識眼を持っていたが不慣れな町場の探索などはむずかしい。こんな時は無駄に動かず切り上げることだ。

「仕方がない、今夜もどこかの軒下を借りるか」

いつの間にかこれも寺の塀とおぼしき場所に出てしまい、内藤新宿とよばれる界隈に迷いこんでいた。このあたりは寺院の数が多く、その隣合わせに大きな藩邸があり、与力の組屋敷などもある。江戸の町の約六割は武家地。二割が寺社地。町人が住む場所はわずか二割といわれていた。

内藤新宿は、東海道の品川宿、中山道の板橋宿、日光街道の千住宿と並んで、「江戸四宿」といわれ元禄年間に開かれていた。

甲州街道も当初、甲州海道や甲府海道とかいわれていたが、海辺を通らないなどの理由で、享保元年（一七一六）に甲州道中と改められた（以下一般的な甲州街道とする）。

甲州街道の最初の宿場は、日本橋から四里（約十六キロメートル）もある高井戸で、品物や人馬の通行も増えるにつれ遠くて不便になり、そこで浅草の名主等が幕府に宿場設置を願い出た。その場所が、信州高遠藩・内藤大和守の拝領地の前だったことから内藤新宿という名がついた。本陣などもでき栄えたが風紀が乱れ始めたため、享保三（一七一八）年に廃宿の命が下り再び宿が開かれたのは、五四年後の明和九年（一七七二）であった。

魁が、空という猿を連れ珍妙な道中で通過した頃、すでに内藤新宿には頽廃的な要素が出来かかっていたのかも知れない。

薄明かりを頼りに行くとひときわ大きな山門の寺があった。風避けになりそうな所もある。今夜はここを借りよう、そんなことを考えながら寺域に入り掛け、下から門を見上げていると、

「何か用かな」

後ろで声がした。小坊主二人を従えた体格のいい僧侶が立っていた。

「はい、私は飛騨より参りました者で円城寺様のお屋敷を探しておりましたが、最早夕暮れとなり往生しておりますご門前をお借りしようと計っておりました」

「ほう、円城寺様とな。ま、とにかくお入り」

「あの一、私はまだ何者か話しておりません」
「そのほうの目は澄んでおる。悪人の顔とも思えん。この者の世話をしておやり。後ほど部屋へまいられよ」
　そう言うと大股で式台を上がり中へ消えた。
「あなたは運がよかったのです。めったに住持に声などかけてもらえないほど位の高いお方なのです」
提灯を下げた小坊主の一人が言った。
　魁達がなかに入ると山門は閉じられた。
　本堂を案内したのは、納所の僧侶だった。
　　由緒のありそうな寺の間はすべて優美な造りで、ところどころに灯がともされ、その光に浮かぶ華麗さに魁は目を見張った。たびたび歩を止め僧侶にうながされる始末だった。同時にたまさか足を止めた寺社でこんな奥の方まで通されることに、魁は何かの罠にはめられているのではないかと、少なからず身構えてもいた。
　鍛練の日々を送り忍びとして鍛えられてきた魁は、絶えず身構える習性が身についている。
　そんな魁に、長年の修行を積んできているのか僧は
「安心なさいませ。ここで湯をお使い下さい。寺には法衣しかないので他の者が入山した時の衣類を進ぜましょう。お使い下さいとの住持からのお言葉です」
そう言って湯殿に案内した。
「少々勝手を申しますが、小さな生き物の連れがございます。決してご迷惑は掛けぬつもりですが、同道を許されましょうか」
「小猿のようですね。先ほどより籠の中から顔を出しております。どうぞご随意に」
　夕方の勤行はすでに終わっているのか、あたりは閑散としていた。それでも風呂にはすぐ入らず、しばらくあたりの様子をうかがっていた。空も籠から出ない。
　こんなきれいで大きな風呂場は初めてであり、久し振りの沐浴であった。飛騨の村では山の中の自然の湯浴みで、当然露天風呂であった。
「空よかったな。お前も疲れたろう。体をきれいにしてやるからな」
　旅の汗を流し用意してあった衣服を身につけ、庫裏をのぞいた。裁っ着け袴は膝の少し下まであり、着物は筒袖の袷だった。木綿の決してぜいたくな布地ではないが、不思議に寸法が合い、魁にとっては初めての感触の衣類だった。
　すでに膳の支度がととのっていた。
さきほどの僧侶が終わりましたら、そばの鈴を振って下さいと言い置いて奥へ退がった。大盛りの麦飯と味噌汁、根菜の煮つけと質素だったが魁にとってこの上ないご馳走だった。木の実ばかりが続いていたからである。
　空も土間の板敷きの上に置かれた野菜の端切れをさっそく馳走になりだした。
「空、キョロキョロするな」
　魁に叱られるので静かに口を動かしている。空は初めから魁のそばで成長し、食べ物を奪い合う経験がないので、その点では鷹揚であった。
　夕餉の後、再び僧侶の案内で改めて住持の部屋に通された。

「ホウ見違えましたぞ。どこから見ても立派な若武者振りじゃ。さきほどの衣類はあまりにもひどかった。あれのままではこれから訪ねる屋敷の方でも信用しかねたであろう。拙僧はこの寺を預かっている香善と申す」
「お世話になりまことに有り難いことにございます。私は魁といい、外に置いてある猿は空といって供のような者にございます。飛騨の里から出てまいりました。衣類は道中でいたみました。このまま頂いてよろしいので」
「そのままでよい。それよりこんな偶然があろうかと感じ入っているところでな。先刻は、拙僧は円城寺様の所に参っておった帰りだったのじゃよ。その折り用人様が飛騨から山猿がおりて来るはずじゃがと話ておってな、門前でそなたに会い話を聞いて、これも仏縁のなせる業と思っておりますのじゃ。用人様もお口が悪い。なんの魁殿は山猿なものか」
　そう言うと鉄瓶の湯で茶を点て、魁の膝の前に置いた。
「そなたが忍びの修行を納めていると洩れ聞いて、も一つ驚いたのはこの寺に服部半蔵の墓があるということじゃ」
　服部半蔵は忍びの頭のように思われているが、実像は違い八千石の旗本であり大名に匹敵するほどの人物だった。
　明智光秀の謀反の時、和泉堺にいた家康を助けた。その時の功を家康は喜び、のちに伊賀の忍者を召し抱えたおり半蔵の配下として統制させたのだという。
　それの由来によるもので、半蔵が配下の忍者を率いてとびまわったかは定かなことではない。この寺は養祥院剰念寺といい、臨済宗の五山の一つの末寺としても広大な寺域を持つ寺院なのである。
　　最初の創建は古く天正年間（一五七三）の頃といわれている。しかし度々の火災で消失を受けたが、大名家や武家などの帰依者が多く、その度建て直しを支えられてきた。
　文禄四年(一五九五)十一月、服部半蔵正成は五十五歳で世を去った。半蔵の墓は今もひっそりと墓地の片隅に祀られているが、火災などでいたんでいる部分もあるという。
「さきほど、寺の者を円城寺様の元へ走らせてある。明日の朝の勤行に出なされ出立は案内させよう」

　　翌朝の勤行は、どこにこれだけの僧がいたのかと思うくらいの数の僧と一緒に、魁は末座ながら仏の前に頭をたれたのだった。
「気をつけて行かれよ」
　挨拶に出た魁に香善は言い、小坊主と昨夜の僧に見送られ、そこまで来ている春の日差しの中、魁は寺の家人の案内で迷うことなく円城寺家の門前に立つことができた。
　　屋敷の門構えは片番所付きの長屋門であり、敷地一〇〇〇坪余はあるかと見える。
　　邸内に姿のよいくぬぎの大木があり、その枝がほどよく広がりをみせている。横に立っている門番に、付いてきた寺の家人が何か言うと、門番はちらっと魁を見て中へ駆け込んで行った。家人も去り、魁は門前の脇にある、松の大木の影に身をいれた。疑とか、危を計る時はまず人の前に出ないのを常としていたからである。

　一人の若い武士が出てきて、あたりを見ながら訝しげにしている。魁はひと呼吸するとふっと前に出た。
「飛騨のお頭の命により参上仕りました魁と申します」
「おお、おられたか気配もせぬさすがじゃ、用人様がお待ちしておられる。ささこれへ」
　屋敷はかなりの広さだ。表玄関の式台の土間には客でも来ているのか、草履が幾足も並んでいた。庭を廻りしおり戸を開けてなおも進むと、書院風の部屋の廊下に立派な初老の武士が立っていた。魁は今通って来た所を頭に入れつつ片膝をつき、下から武士の顔を見上げた。

二

二

　穏やかなが、朝の光にゆれている。
川面には薄く霧がたち込め対岸は霞んで見えるが、すでに漁をしているのか川には小さな舟がいくつか出て、しきりに網をたぐっている。
　川幅の広いあたりに、飛び飛びに中州がいくつか見え、白鷺が五・六羽、もうじゅうぶんに餌を食べたのか、片足で立ち朝日に面をむけ、周りには小さな鳥が群がっている。
　この時代、川は度々の洪水により川筋がよく変わった。その蛇行によって道筋も変化していたのである。
　土手道とよべるほどの道幅ではない。狭く細い土道に新芽を出しはじめた雑草が露に濡れて覆いかぶさり、履いている草鞋と足に巻いている布にまとわりついてきた。
　魁は、そんな足元と大きな流れに交互に目をやっていた。
たまの川、としか今は分からない。
　流れはゆったりと、あくまで穏やかだった。

　昨日、魁を待っていた円城寺家用人左門は
「よく参った。御家老もお待ちじゃ、あちらの池を渡った東屋におられるから拙者と共にまいれ」
　庭石の上の草履を履き、魁の先を歩きだした。
　池には鯉が数匹泳いでいたが、人の気配に泉水がゆれた。
　東屋に近づいた時、その先の庭で足が悪いのか少し引きずるようにして掃除をしている男がいた。何気なく見た魁は（留吉さん…）と、思わず声を出しそうに なった。相手もフトこちらを見た。誰であるかすぐ判断がついたのか、箒を持ちなおすと近くの小屋にすべりこんでしまった。すべて瞬時のことであったが、今 の魁には他に動くことは許されない。何事もない顔に戻していた。
東屋といっても贅沢な造りで小さな庵風の趣だ。中には敷物が敷かれ火鉢、簡単に茶などを喫する設備が整っていた。
　魁は土間にさきほど左門にしたと同じに片膝を付き、家老の言葉を待った。
「そなたが飛騨の館のある村から参った、市蔵かかわりの配下の者か」
「はい、頭の元におりました魁と申します」
「そなた、何かおもしろい生き物と一緒とか。見せてみよ」
「まだ小さい猿にございます。多少しつけをしておりますので、何かの役に立つかと連れております」
　そばの籠の中から空を引っ張り出した。空は嫌がったが、「空ご挨拶じゃ。おとなしくいたせ」
「まだ子供じゃな。これはどうじゃ」
庭の松の木からとれたのかその実を袋に入れて空に投げた。

　空は用心深くすぐには手を出さない。
「空、頂け」
　魁の顔を見、相手にちょこっと頭を下げ、袋を持つと、籠の中へ隠れてしまった。
「賢そうな猿じゃ。さてと、申し遅れたが、わしは円城寺家の家老を勤める、望月長門と申す。殿は円城寺播磨守宗貞様と申してこの屋敷の四代目に当られる。ただ今殿は城の方に御出仕中じゃ。わしは殿の供を控えてその方を待っていたわけじゃ。そう言うと改めて魁に向き合った。
「ここへ来るについて飛騨で何か聞いたことがあるか」
「些少は…、甲斐の国に行くことになるやも知れないと」
「うむ、探ってもらいたいものがあってな。甘草じゃ、市蔵から聞いてはおらぬか」
　甘草は戦国時代（武田信虎の頃）に、甲斐の国に持ち込まれたものに由来すると伝えられている。甘草はカンゾウともよばれ、重要薬用植物で、平安時代には 常陸の国、陸奥の国あたりなどから朝廷への献上品に含まれていた記録もあり中国などでは二千年以上前から使われていた。
　日本には奈良時代に唐の文化と共に伝来したのではないかとの説もあり、カンゾウの根が漢方薬としても、甘味としても使用できるところから大変に貴重な植物 といわれる所以なのであり、いかに太い根を育てるか栽培方法もむずかしい御薬草なのである。甘草の栽培年数は大体三年ほどといわれ、また広範囲に根を張る ため収穫による掘削により、土醸が荒れることもあるのだ。
　しかし、それによって得られる益は計りしれないものがあるのもまた事実で、朝鮮人参と共に滅多に手の届かない貴重品であった。
「種 でも苗でもいい。手に入れたら飛騨の村に持参し育てるのだ。だが栽培方法も熟知せずばなるまい。そこがむずかしいところよ。甲斐で育つものが飛騨で育成で きぬ訳はなかろうが。魁、万端その方の判断に懸かっておるのだ、これは殿の発案じゃが薬草園を作りたいとのおおせじゃ。もし根分けなどが得られれば、美濃 の和紙と交換でもよいとのおおせでもある。甲斐にも円城寺家と通じておる向きも在しておるからその時は相談いたせ。だがいかなる折りでも心を許すな」
　美濃和紙の起源は定かではないが、奈良朝あたりまでさかのぼるとされる。奈良時代は仏教の普及などで写経（お経を写すこと）が盛んだった。和紙は都である 奈良では特に需要があり、正倉院文書にも美濃紙が使われていた。美濃は紙の原料となる楮が良質で多く取れたからだという。

　織田信長の時代から飛騨・美濃の地方には小さな豪族はかなりの数があった。その中でも 規模、格ともに大森家は軍閥的にも権威ある一族だった。　大森家は飛騨山脈の尾根伝い、美濃と信濃の国境のあたりに領地があった。始祖の大森はもともと土着の武士であったが才覚があり、戦国時代台頭めざましく 武士集団の頭となり、いつか飛騨きっての豪族となっていた。領地である村で、戦力となる人材なども育成していた。
　また、都から離れた山の国というイメージからか、政治的流刑者がしばしば配流されるのを村

に預かりその知恵を利用した。中央政府に働きかける力さえもちはじめていた。

飛騨は山国で耕地も少なく食料の確保も重要課題であった。山衛は紙の原料である楮などにも目を付け、栽培技術にも力を注ぎ、それらを元手にして米やアワなどに代えていたのである。

また美濃国内には名の知れた献上品があった。長良川で捕れる鮎を鮨にしたものと、干し柿（蜂屋柿）である。鮎鮨は現在の握り鮨ではなく、鮎をご飯の中に入れて発酵させた熟鮨で、元来は鮎の保存方法の一つでもあった。

蜂屋柿は一〇〇〇年以上の歴史をもつ、飛騨地方の特産品の渋柿で、収穫した渋柿を熟させ硫黄で燻蒸させると、えもいわれぬ味の干し柿となるのである。そ れらは、時の権力者や、歴代の将軍などにも献上され、「堂上」の冠がつけられたほどで、献上する代わりに年貢や労役が免除されたとさえいわれる高級品だっ たという。

一方で織物、美濃和紙などの流通などの利権にも係わり、尾張藩の政策がしだいに美濃の所領内に浸透していくにつれ、大森家も隆盛の礎を固めていった。

信長・秀吉とつづいたがその死後、家康中心の政情となり、関ヶ原の戦い以降、美濃の武将の没収地は、天領（幕府直轄地）となった。

飛騨は、一五八六（天正十四）年に金森長近が、秀吉から飛騨三万八〇〇石を与えられていた。関ヶ原で家康側につき本領はそのまま安堵され、六代にわたり飛 騨の国づくりにつくしたが、（元禄五年）、出羽国、上山（現・山形市）へ転封された。かわりに陣屋が設けられ、代官による（のちに郡代）飛騨一国の政務が 執り行われるようになった。

絶えず家康側についていた功で加増が与えられていた大森家も土地の名でもある円城寺となり、当主は播磨守宗貞と名乗るようになったのである。

その頃からその飛騨の郡代を、円城寺家が長いこと治めたのである。その地の租税の徴収や一般民政、裁判などをおこなった。郡代は五万石ぐらいの地に一人の 割合で置かれ、当時、全国で四、五〇人いたといわれ、代官所には御家人などから採用した手代や、百姓、町人からも採用した手代などその他の役職も置かれ た。

郡代、代官とも勘定奉行の支配に属した。

すでに江戸には大手門近くに上屋敷があり、内藤新宿に中屋敷と、大川に沿った深川に下屋敷を構えていた。上屋敷は幕府に対する公館であり、中屋敷は世子 などが住み、下屋敷は火災時の非難場所、野菜などの自給場所などとして使われ、魁が望月長門に会ったのは中屋敷であった。

円城寺家は当代及び連なる家老などが、代々経済や時世の趨勢の感覚に優れていた。すでに郡代の役職は解かれているものの、幕府の財政が下降気味のなか、石高より内所ははるかに裕福であった。

「薬草園」といえども幕府の許可なしにはかなわないことで、だが当代の播磨守もまた抜け目なく気を配り、何かと幕閣には常から賂など手をまわしていた。

城中には目に見えない陰謀、謀略、権力争いなどが渦巻き、上層部の立場の人間ほど賂は必要としていた。気にいらねば密かな暗殺など日常茶飯事のことで、その為の情報は、断片的でも常に掴んでおかねばならないのだった。

飛騨に本拠のある円城寺家にとって情報をあつめることは、村の組織を動かせばいいことだが

、今の円城寺家でもごく限られた者のみが知る隠密行為になっていた。
　いびつながら、世情の落ち着きをみせてきたこの頃、二条城や大阪城の警護に当るのも形式的となり、老中支配の大番衆としてすでに五千石の重臣として、躑躅之間詰めとなっている現在、しかしすべては密かに厳密に行われているのだった。
　　市蔵や座を組んで村を出て行く者達は他国へ忍び、数々の情報を探った。確実な事項は幕閣での取引の材料となっていたが、近年では千代田の城内での摩擦事項の方が多かった。
　時代が変り複雑な内容になってきてもその線にそって目的は遂げる。それが円城寺家の裏の貌であり、山衛の遺産だった。
　魁は思いだしていた。頭領の市蔵が村を出ると長いこと帰らないことが度々あった。忍びとしての仕事の時はいつの間にか戻って、いつもの市蔵として魁達といつもの村の仕事をしていた。
　しかし……。
　市蔵と数人の男達がどこかへ出掛け、しばらくして戻ると市蔵は村の外れにある滝に打たれ、茅屋葺きの住まいの部屋の、仏間に祀られてある仏像に一日中手を合わせ、物を言わない日を過ごした。そして、一緒に出掛けた男達も全員が揃って戻ることはなかった。
　物心のついたある時、魁は不審に思い市蔵にそのことを聞いてみた。
「いつかお前にも分かる時がくるだろう」
　それだけ言うと魁の頭に手をのせ、静かに笑った。

　　望月長門の元を辞した後、魁は屋敷を一度出てからそっと裏へ廻り、塀を乗り越え見当をつけていたあの小屋へ忍んで入った。やはり留吉は居たが顔をそむけた。
「やっぱり留吉さんだったね。このまま行く気になれなかったんだ。どうしてこんな所にいるのさ」
「頭領に何も聞いてないのか。俺はさ仕事をしくじったんだよ。皆にも迷惑を掛けた。でも頭領が村には帰せないが、ここで働けと置いていったのよ」
　留吉の話はこうだ。
　やはり魁が想像した通り、市蔵は手下の者を連れ命の下った時、暗殺集団となり主に関東に入り刃を振っていた。
　　ある件で見張っていた相手が留吉の不手際で殺りそこない、取り逃がしたため危うい目に合い、正体が知れそうになった。だが数日後、さすが頭領でしっかりと 事をなし遂げていた。留吉は大怪我をし、掟で始末されるところをその忍びとしての才を惜しみ、円城寺家に担ぎ込み傷の癒えた後、屋敷内外の警備にあたらせ たのである。
「生きているのは恥だと思っているが、こんな体でも屋敷内のおかしな奴は見抜く力はあるんだよ。魁も何を命じられたかしらないが油断はするな。気を付けろよ。また会えるといいけどな」
　頭領の市蔵は芯から非情にはなれない男であった。それが慕われるのかも知れなかった。
　その夜、魁は請われるまま留吉の小屋に泊まった。
「飛騨の館は昔の豪族、円城寺家の発祥の地だったのは誠か、市蔵の頭領からも以前そんなことを聞いた気もするな」

魁は背中の籠の空のことも忘れ思いに沈んでいた。
　更に望月長門は魁に一振りの小刀を差し出し
「これは、昔の戦の折り、深手を負ったある敵方の武将が、介錯を頼み脇差しとして持っていたのを、わしの手に握らせたものじゃ。もう重いものを腰にぶら下げる年でもあるまい。そなたのような若者のそばに置いてもらいたい。
　小振りだが、美濃の名工、丹波兼房の打ち物とみてよかろう。銘は「影房」と言い残しておった」
　しかし、魁は手にすることに躊躇した。この密命が果たして成功するかどうかむずかしい。こんな立派な代物を先に受け取るわけにはゆかない。魁は律儀であった。
　しかし長門は言った。
「もししくじったら、この刃で切腹でも致せ。気にせずともよい。わしはそなたが気に入ったのじゃ。なかなかの名刀らしいから使いこなせ」
　それが今魁の腰に揺れている。元の鞘は朽ち、漆を塗った別の目立たない鞘に納まっているが、刀身の冴えは鋭く、鈍い光を放っている。急に腰の廻りに重みが 加わったようで気の引き締まる思いだった。八寸ほどの少刀で、左門からのは刀身が少し細くこれからの道中差しに向いていた。市蔵からの短刀はとりあえず、 籠の中の空に預けておくことにした。
　府中宿の飯屋で少し遅い昼餉をとった。たまの川で捕れた鮒の甘露煮だろうか、極上の味付けだった。
「猿連れとは珍しいな。どこまで行くのか」
隣に座った男が聞いてきた。目つきが鋭い陰気な男だ。
「気のむくままさ」
　魁は適当に応えておいた。
　剰念寺で施された木綿の衣類が魁の正体をうまく隠す役目を果たしているが、腰の刀で如何ともし難くなるだろう。
　この府中宿を過ぎるといよいよ甲州街道に入る。古い社が目についた。近づくと「大国魂神社」とよめた。
　神社の前からケヤキの木が道に添って並んでいる。相模の国の、あの社とは違う雰囲気を、魁は頭の中で比べながらここでも真剣に手を合わせて拝んでいた。
　大國魂神社は、社伝によれば、景行天皇四一年（一一一）武蔵の国の護り神として祀ったのが始まりと伝えられる古社であり、大化の改新（六四五）後、武蔵国府が置かれた。
　またケヤキ並木は、康平五年（一〇六二）源頼義・義家父子が奥州阿部の乱「前九年の役」を鎮圧し、帰途、戦勝祈願の返礼に、ケヤキの苗千本を寄進したのだという。
「どこの社も由諸あるものなのだな　　魁は飛騨・美濃の社も思い、振り返りながら離れた。
　この頃の府中は湿地帯が多かったが、本陣、脇本陣など整備され、大國魂神社を中心に宿場町として栄えていた。ここからは随神門前を通り、高札場前から高 安寺下へと下り、水田地帯を抜け、たまの川を渡り日野の万願寺の一里塚へと通じて行くのだ。寺伝によると、高安寺は暦応年間（一三三八）に足利尊氏が、こ の地にあった別の寺を再興し高安護国禅寺と号した古刹で、崖の上にあったため、戦の時は本陣になったという。

日野の渡しで多摩川を渡ったとき、船頭に「多摩川」という名の川であること。この渡しも洪水などにより時々場所が変わるのだという。そしていくつかの地名を教えられその会話の中で次の宿、八王子が近いことを知った。

三

遠くに望む連山は、どの頂きもまだ深々と雪をのせ、人を拒んでいるように見える。これから自分はあの山々の麓に近づこうとしているのだ。

ひときわ形よくドッシリと大きい山。あれが話に聞く富嶽とよばれる山だろう。

その山の半分ほどがこれもまた雪をのせたままだ。

三月に入って間もない風はまだ冷たい。その冷たさばかりではなく、独り立ちになって初めての重圧が、心にかすかな震えをおぼえさせた。

先程から後ろを付けている者がいる危害を加えるにおいではない。だが、油断はできない。

魁は道を少し下りて、水に押し流されてきて打ち上げられ転がっている大きな丸太に腰を下ろした。その肩に背負った籠の上に、猿の空が大人しく乗っていたが、ヒョイと飛び下り、魁の横に座るとつぶらな目で、心配そうに魁を見上げた。

「心配するな」

腰に下げた袋から木ノ実を出し、空に与えた。

空は賢い。まだ子供だが魁の気持ちを理解しようとして木の実ののった魁の手を掴んだ。だがその木ノ実を口に入れようとはしない。警戒の雰囲気を察知していた。

その手を空にあずけながら、そのまま顔を少しななめにしていきなり

「そこの奴、隠れてないで出て来い」

大きな声をはりあげた。

曲がっている道の二間ほど向こうの斜面に、体を丸くしてうずくまっていた小さな影が立ち上がった。

「お前、小助じゃないか、どうしてこんな所にいるのだ」

小助と呼ばれた影は、そのとたん飛ぶようにして近づき、魁のそばにひざまずいた。

「ごめんよ。兄貴、怒らないでくれよ。帰れ、なんて言わないでくれよ」

「お前、どこから俺をつけて来たのだ」

「うん、見つからないように苦労したよ。だけどこの辺りは草原で隠れる物がないから、すぐに見つかると思っていたよ」

「誰かつけてくる気配があったから、わざとゆっくり歩いてみたが、小助だとは驚いたな」

「兄貴のことが心配だった。そしたら市蔵の頭領が一座の中に入って江戸まで行け、と言って出してくれた。何があっても魁のそばを離れるな。だが、どのくらい魁に気づかれずに行けるか試してみろ。そう言ったんだよ」

「つけられているのは分かっていたが、どんな奴か、そろそろ見てやろうと思っていたのだ。もうばれてしまうようじゃ失格だぞ」

「認めるよ。兄貴に早く追いつきたい気持ちをおさえきれなかったのでそれで焦ったんだ。大失敗だったよ」

「今回は大目にみるが、次からは、はやる気持ちは命取りになることを肝にめいじておけ。修行

が台無しになる」
「悪かったよ。次からは心して気をつけるよ」
　魁は小助の頭を抱き寄せた。
　魁は二十歳。小助は十五歳。共に孤児だった。
　二人は、飛騨の国の白根ヶ岳の麓の村で育った。
　村の長も代々優れた者がすべての運営を統括した。その下に頭領の市蔵などがおり、魁や小助などのように拾われ厳しい掟や修行に耐える者達の環境づくりなど、統制もとれていた。
　戦国時代は遠のいたものの世相の方は収まりきれず、国境や村々の争い、一揆などが度々起り、悲惨を極めていた。
　魁もそんな争いの中で家を焼かれ、両親や兄弟達も皆死んでしまい魁だけが一人残され、食料もなくさまよい歩き、あげくは木の下で倒れていた。
　そこへ通りかかったのが、旅の傀儡師市蔵だった。
　傀儡師は町や村などで人々を集め、戦の話や言い伝えなど人形などを使っておもしろおかしく話し、薬草なども持ち歩き信用を得るのだ。そして周りの話に耳をそばだてた。どこも争いの後はひどく、いたるところにそんな子供達がいるので魁を見ても別に気にかけなかった。
　そばを過ぎようとしたとき、
「おじさん、戦いはもう終わったのかい。おじさんどこから来たの」
「そんなこと聞いてどうするのだ」
「おじさんの目怖いね」
　魁はそう言うと、臆することなく市蔵を見返した。
「お前、めし食うか」
　肩にかけた箱の中から、にぎり飯を二つ出して魁の手にもたせた。ヒエの入ったにぎり飯だ。市蔵は魁の瞳を見ていた。貧しい身なりながら、整った顔立ちと澄んだ瞳をしていた。
　市蔵の勘がうごいた。（物になるかもしれない）
魁を連れて村へ帰った。魁、五歳のときである。
　それから十五年。魁は予想をうわまわる忍びに成長した。修行も鍛練も激しく、市蔵は容赦しなかった。
まれに見る俊敏さと、年齢に似合わずもちあわせる冷静さは忍びにとって、欠かすことのできない条件でもあり判断力も優れていた。どんな時も魁はひるまなかった。
　時として教える市蔵も舌を巻くほどだった。市蔵は自分の目の確かさに、自分で満足していたのである。
　市蔵自身やはり孤児であった。市蔵がこの村に迷い込んだのは偶然で、戦国時代の余波と、戦の気配もくすぶり続けている万治年間で混乱はひどかった。村には 畑があり柿ノ木が何本もあった。熟れた実は村人の大事な糧である。親にはぐれ空腹をかかえさまよい歩いていたところだから夢中で木にはい登り、むしり取っ てむさぼるように食べているところを取り押さえられた。
「だいじな実を勝手に食った」
　と男達に殴られているところに、年かさの男が来て、「少し待て」と止めた。

「お前、木に登るのが得意なのか」
そう言って太一をジッと見た。
　柿の木はかなりの高さがあったからである。
「ウン、木登り上手いし、好きだよ」
　住んでいた村では子供達の間で一番だった。
　　その男、初代の市蔵はその時、太一という名だった今の市蔵を見込んだのだった。その後、初代市蔵は不幸にも殺された。かねて（俺に何かあったらお前が市蔵を名乗れ）と言われていたから、異存なく二代目となったのであった。
　その二代目市蔵も一度旅に出ると、どこで何をしているのか、長期間村に戻らなかった。しかし情報はいつも確実であり優れた忍びであったが老いたのである。
　魁に自分の思いを託したかった。魁はそれに応えねばならず、最早後に引くことは許されなかった。
「もう俺から教える事はない。あとはおのれで求めて行け。ただ一つ、世間は広い。人間をよく見極めよ」
　市蔵の歩いた道と自分がこれから行く道が、魁の頭の中ではっきりと重なっていた。
　　魁の後を追ってきた小助は、村と村の争いで親にはぐれてしまい、焼け残った神社の柱の下にいるところを、野外の見回りに出ていた市蔵と魁がみつけた。
「まだ生きているぞ」
　　竹筒の水を飲ませた。
「村へ連れて行こう」魁は子供を背中にのせようとした。
しかし市蔵は反対した。可哀相だが、こんな弱っている子供など連れて帰ったら、長にしかられるし手足まといになり使い物にならない。と言うのだった。
「おれが面倒をみる。だめなときは捨てる。おれに免じて許してくれ」
必死に頼む魁に市蔵はおれた。そして、いままで何も言わず黙々と市蔵についてきた褒美としようといった。
　小助は名前と同じような小柄な体だったが、魁の手当てで元気になると教えることはすぐに覚え、その上なかなかの知恵者であった。魁に恩をかんじるのか、
「あにき、あにき」
と付いて歩くが、教科はきちんとこなし、とくに手裏剣が得意だった。それに魁と小助は馬が合ったのである。
　魁が命を受け外へ出た後、村の別の一団と共に関東に魁を追わせたのは他ならぬ、市蔵だったのである。
　遠くから魁たちを見守る心配りでもあった。

四

「小助、お前昨夜はどうしていたのだ」
「内藤新宿で、親切な茶屋のおばさんが皆を泊めてくれたよ。一座の人が円城寺家に聞いたらすでに出て行ったと聞き、皆と別れ、どこで追いつけるか考えると心細かったよ」
「頭の許しがあったのだ。これからは俺とお前と空と、二人と一匹の三人道中だ。心強いが気を緩めるな。とにかくこれから八王子の宿まで急ごう。お前飯はどうした腹は空いてないか。府中の飯屋で小魚の干して焼いたのをわけてもらったから食べるか」
「まだ大丈夫だよ」
「これからは山道に入るからとりあえずどこかで店を見つけよう。円城寺の家老から路銀を受け取ってきたから、当分は持つだろう」
　八王子の宿は、内藤新宿を出て甲州街道四番目の宿駅であり街道最大の宿場である。ここにある大きな寺で通行手形や山地図などを受け取ることになっている。
「小助、油断をするな。俺にとってもお前にしても初めてにしては大変な仕事なのだから」
そう言いながら、道々魁は小助に内容をかいつまんで説明した。
「あにき、そんなこと俺たちに出来るかな」
「初仕事にしては責任が重い。だけど頭領が俺たち二人を選んだのよ。やらねばならないだろう。お前嫌なら村へ帰ってもいいぞ」
「いやだよ。あにきと一緒だから大丈夫」
「言っておく。これからは俺を頼るな。一緒でも一人の覚悟で判断するのだ。いいな」
　山道の二股の所に三軒ばかりある茶店が目についた。ちょうどいい、と口に出そうとして魁は小助の筒袖を引いた。
「あの店先を見ろ。府中宿の飯屋にいた男がいるんだ」
　それも一番手前の店だ。嫌な予感がした。
「小助、お前は顔を知られてないから、知らぬ振りして様子を見てこい。腕の見せどころだ」
「分かった。うまくやるよ」
　それにしてもどこを歩いてきたのだろう。今まで姿を見せなかったのに。あらためて魁は周りを見回した。
　小助は何食わぬ顔をして店の中に入った。
店 の中はあまり広くはないが、この辺の山の木で作ったのか、不似合いなくらい立派な飯台と椅子が置いてある。店と調理場の境には油のしみた縄のれんがかかっ ていた。その横の柱に「泊まり一人一六文（二十円くらい）」とあり階段がみえた。五品ばかり料理の名前が木の札に書いてあり　男と女の客が五人ばかり飲ん だり、食べたりしている。
　例の男は外の縁台で銚子を三本置き、つまみをとって飲んでいた。
「おやじさん、すまないがにぎり飯を五つほど作ってくれないか」
「はいよ。少し待ってなよ、けどお前一人で五つも食うのかえ」

「連れがけがして向こうで待ってるんだよ」
小助は男が座っている縁台の端に座り、腰に下げた巾着袋からわずかな金を、男に見えるように出した。
「ちぇっ、足りるかな」
その声に男が反応した。
「お前どこまで行くんだい。一人なのか」
「八王子の知り合いの所に行くのさ。おじさんはどこまで行くんだい。足が速そうだね、山道には慣てるのかい」
「俺はこの街道のことはよく承知してるからな。裏道なんぞもよく分かってら一な。一緒に着いてくるんなら教えてやるよ」
「すごいんだね。でも俺、連れと一緒だから無理だよ。おじさん飯が終ったら出発かい」
「ああ、今夜は八王子泊まりだな。馴染みの女が待ってるからよ。お前も早く行かねえと途中で日が暮れるぞ」
「うん、わかってるよ。飯食えば連れも元気になるだろう。おじさんまた裏道を行くのかい。それはどの辺なの」
「いや、今度はこの山道を行くよ。裏道は下の川沿いに歩くけど、ずっと続くわけじゃねえ」
　しばらくして竹の皮に包まれたにぎりめしができ、金を払うと小助は出掛けに男に、
「ありがとう。お互い気をつけて行こうね」
　小助は言うと男の様子を見た。酒に酔っているらしく女のことや、裏道のことをチラと洩らした。小助は子供らしく振舞ったから男も少し油断したようだった。まだ何か言いたそうにしたので小助は逃げるようにかけ出した。
　急いで戻ると、木の上から、
「小助、ここだ」
魁の声がした。行き過ぎもどると魁が木から降りてきた。小助は男とのことを話しながら、
「にぎり飯をつくってもらってきたよ。ここで食べるかい。それともこのまま行くかい」
「本当は一気に八王子まで飛ばすつもりだったが、あの男はただ者じゃなさそうだ。余計な争いは避けたいな。じゃ、飯でも食って考えようか」
　少し道から奥に入り、それでも茶店が見えそうな場所の石に座り、竹筒の水を飲みながら竹皮包みのにぎり飯を食べ始めた。
「空、お前も腹が空いたろう」
空は魁と小助の間にはさまり、にぎり飯と魁が買っておいた小魚とを両手に持ち静かに食べていた。
「あっ、あにき、男が店を出るぜ」
　　見ると男が振り分け荷物を肩に掛け、ゆっくりと歩きだし、その時、何を思ったのか男がキッと後ろを振り返った。見えない筈だが、二人はあわてて首をすくめた。
「あの店に行って男のことを聞くんだ。何かわかるかも知れないし体を少し休めておこう。いよいよ油断できなくなるぞ。下を流れる川の両側からも一応目を離すな」

　甲州道中を往来する旅人が、日野あたりに宿泊することはまれだ。旅籠の数も少ないし、日野から八王子間は一里（四キロ）ほどだからである。
二人が店に入ると他の客も出発したのか、ガランとしていた。親爺がいらっしゃい、と出てきたが小助を見て、
「さっきの小僧さんか、なんだい」
「さっきはありがとう。聞きたいことがあってさ」
　魁が、素早くあたりを見回し
「さっき外の縁側で酒を飲んでいた男はこの辺の人ですか」
「いんや、だが時折見かける奴さ」
「どんな素性の人ですか」
「あ　やつは〔かも引き〕の又三といって、金を持ってそうな人や、訳ありな人を見つけては言いがかりを付け、言うことをきかないと八王子の下役人に告げて、宿場　に着くのを待ち構え、番所へ引っ張らせ金を巻き上げる嫌な奴さね。前にも日本橋のお店の旦那と手代が、八王子に織物を仕入れに行くのに無理に案内すると　いって、断ると態度を変えいつもの手を使ったが、幸い二人は八王子のその筋に明るく事なきを得たということだ。わしはあの男は店の中には入れないんだ。旅　人の話をそばで聞いては悪さを仕掛けるからな。お前さん達も気をつけなよ」
　八王子まではそれほど険しい道ではなさそうだ。思いがけず腹拵えもできたので、夜にかかるが行くことに決めて歩きだした。
　男の名前は分かった。それだけでも収穫だ。
確かに道に添って小さな川が流れている。これから先にある浅川の支流で、田植えの季節などに農家が田んぼに引きいれる水であり、日常の用水なのである。
丘陵地帯なのか崖道が多くなってきた。その崖にへばりつくように竹が密集し、湧水が所々に流れている。崖の上は雑木林に添って道もくねり、小さな集落がいくつかあるらしく灯が風にゆれている。しばらくすると遠くに、川が見えてきた。
「あの川の支流だね、こっちの小さな川」
　支流は崖の下をまわりながら流れているらしい。
「昼間なら裏道も見えるかもしれないけど、今は無理だ」
「ここまで来たらもう必要ないね」
「だが、あの大きな川、渡しがどこか探さなきゃ。早く探さないと渡しが終わってしまうよ」
　二人は急いだ。やっと手前の川べりに着いた。よく見ると十間ほど先に小屋があった。船もある。やはり道の近くに船着場は接続していた。
　　二人は船のそばに近づいた。船頭が今しも河原に立てかけた竿を抜き、船に乗ろうとしていた。
「すみません。向こう岸へ行くのですか。お願いします」
「おお、あんたら間に合ってよかったな。これで今日の終わりだ。しばらく客を待ったがもういねえとおもっていたよ。このへんじゃ泊まるところはねえからな」
　目がなれよく見ると客は５人乗っていた。船頭は二人だ。
　その時、舳先にいた男が振り向き、

「お、小僧さっきは調子いいこと言いやがったな。やっぱり連れは猿野郎か」
又三だ。まだこんなところにいたのか。
「ああ、さっきのおじさんだね。今頃どうしてこんな所にいるのさ。八王子で女の人が待ってるって言ってたじゃない。待たせると悪いよ」
　小助が子供っぽく言った。
「うっせやい。そんなことおおきなお世話だ。それより手前らどうもうさん臭い奴らだ」
「どこがうさん臭いのさ。おいら達八王子へ行くだけだよ」
「俺は勘がいいんだ。におうんだよ。手前らただもんじゃねえな」
　主船頭が
「又さん、いい加減にしなよ。お前さん悪い癖だよ。旅人にだって色々事情があるってもんだろ、他の客にも迷惑ってもんだよ。船の中は俺の裁量だからな」
「ま、いいや、だがこれで済むとおもうなよ」
　その時、魁が何思ったか、
「船頭さん、八王子代官所はどの辺にありますか」
　　本当は小峰山（宝樹寺）のことを知りたかったのだ。
（宝樹寺）は、開山は行基で寺内から延慶三年（一三一〇）の銘板碑が発掘されている古色の寺だ。
「代官所に行くのかい。着いたら教えるよ」
「そうですか。よろしくお願いします」
　魁は飯屋の親爺が言った通り、はなから嫌な奴に目を付けられてしまい、どこかで振り切るしかない。と思った。
宝樹寺が権威のある寺だということは、望月長門に聞いて承知していた。その名前を出　　し、男を遠ざけたいと思ったが最初はやはりそれは外した。男に対し意表をついただけでいい。でもこの先駄目なら…、魁は糺すつもりだ。
　案の定、魁と船頭の話を聞いて、又三は瞬間ひるんだようだったが、船の舳先の提灯に映し出された横顔の目は、やはり狡猾な光を帯びていた。
　川は先の「多摩川」の半分ほどの川幅だが、水量は豊富で流れは速かったが半刻もかからず対岸に着いたのである。
「お小僧さん達、ちょっと待ってな。船を河原に引き上げちまうからな」
船頭はそう言うと客を降ろし、船をもう一人の船頭と二人で引き揚げ、固定の丸太をあてがったりし終わると、
「あいつこそこそ行きやがったな。まったく虫の好かねえ野郎だぜ。八王子の下役人と変につるんでるという噂だ。あんた達も気を付けて行きなせえよ」
　　魁は辺りに人影がなくなるのを確かめてから、主船頭改めて訳を語り、宝樹寺に行くことを話した。普段から男にいい感情をもってないらしく、協力的に寺の場 所や、間道や畦の道など土地の人しか知り得ないことを丁寧に教えてくれた。魁達が宝樹寺に行くことは、なるべく表に出さない作戦だ。魁は厚く礼を述べ、渡 し賃の他に小粒金を渡し、船着場をあとにした。
「小助、寒くないか」

　魁は自分の腰に巻いていた布を小助の肩に被せた。
屋敷の留吉の元を去る時、留吉が、
「役に立つよ」
そう言って草鞋を替えてくれたり干し飯、布などを持たせてくれたのである。留吉の思いがこもっている品だ。
低い土手を這い上がると、昼間雪をのせてそびえていた山々は黒く、遠かった。

五

　八王子の町並みが、木々の間のかなたに広がっている。消えそうな灯が小さく、星をちりばめたように散らかっていた。船頭に教えられた道を辿りながら、魁と小助は別々に歩き絶えず気を配る。途中、常夜灯がひっそりと、あたりをボンヤリ小さく小道をてらしていた。
　何か察すれば空が魁の耳を引っ張るのだ。魁の緊張は空にもすぐ影響を及ぼす。
　フクロウが鳴く。魁だ。
　闇の奥に黒々と樹影が広がって見えてきた。
「小助、向こうの方角に大きな森か林がある。あれがそうじゃないか」
「うん、そうかも知れない。社のような屋根も見えるよ」
　雲の間から淡い月の光がおちてきていた。
二人共離れた所で独特の声で合図するが決して近づかない。修業を積んだものだけに通じる風のなかの微妙な振動。普通の人間には聞きとれない会話だ。
大きな山門が現れたが、重そうな扉は閉じられ、横にある通用門も閉まっていた。
　「しばらく様子をみるぞ」
　四半刻（三十分）ばかり二人は要所で姿を隠していた。
何の気配もない。月光が静かにあたりをつつむだけだ。
　「入るぞ」
　小助がまず塀を乗り越え、魁は肩から籠を下ろし、
　「空、行け」
　と、籠から空を出し、塀の中へ投げ込んだ。そうして置いて自分も飛び込んだ。
中はすごい広さだ。
もう、五つ半（午後九時）に近いだろう。
　大門の脇に番小屋があり戸の隙間から覗くと、夜番が二人酒を飲んで居眠りしていた。
「もーし、夜分遅く頼み申す」
　魁は戸を軽く叩いた。
酒は飲んでいてもさすがは大寺の門番。
「誰だ。どこだ」
「円城寺様の、望月長門殿よりの申し付けにより参りました。お開け下さい」
　腰高障子を開け一人の方が酒臭い小屋の空気と共に顔を出した。魁の上から下までサッとみてから、
「話は聞いておる。さき程、飛脚便がきた。だが遅かったではないか。それにしてもどうやって入ったのだ。塀を越えたか」
　魁は府中からのことをかいつまんで話した。
「それは気苦労なことであったな。明日夜が明けたら、寺の周りを怪しげな奴が徘徊しておらぬ

か見回ろう」
　寺はまったくの静寂のなかにあった。背後の森林は、壮大な建物を覆い隠すように守るように繁っている。
「執事様がいつでもいいから知らせるように、とのことです。案内します」
　そういって歩きだしたが、暗闇から小助と猿が出てきたので、門番は驚いて後ずさりした。
「ご心配なく、連れにございますれば」
かなり奥の方で本堂の脇をまわり竹藪の小道を抜けたところに別院が何棟かあった。その端の一棟の寺院の式台に立ち、
「門番の喜八にございます。円城寺様掛かりの者、お連れしましてございます」
　しばらくすると若い寺僧が出てきて、
「ご苦労です。下がってよい」
喜八という門番は、魁達に「じゃあな」そういって戻って行った。魁と小助は式台に片膝ついて控えていた。
　寺僧は魁達に目を向け、
「横にくぐり戸があるから、庫裏に行き手足をすすぎ、晩食を食べ風呂で埃を落として待ちなさい。万事、下人が承知しておるから。後で会おうぞ」
　魁は言われた通り庫裏へ行った。別院の庫裏だからそれほど広くはない。温かい風呂と夕餉は有り難かった。下人の爺はよく世話してくれた。動物が好きだといって空の餌を用意してくれたので空は大喜びだった。
「この寺院は大きいのですね。僧も多いのですか」
　空に餌をやりながら爺は、
「ああ、そうじゃ。明日になればわかる。執事様の話が済んだらこの庫裏の横に寝床をつくっておくでな休むがいい。明日のお勤めは四時じゃ」
それだけ言うと姿をけしてしまった。
　魁と小助はそこで待っていると、小坊主が迎えにきた。
　小部屋にさき程の寺僧と、僧衣の襟元に白い絹を巻いた中年の僧が座っていた。
「ご苦労です。私は執事の良知と申す。こちらは知然院主様じゃ。廊下におる連れも入るように」
　魁は小助の他に小猿がいることを告げた。
すべては耳にはいっているのだと言う。お構いなしである。
「珍しい忍びじゃな。過ぎし日に数度参ったことのある市蔵などは、見ただけでただ者でない気配を漂わせておったがな。ま、この方が人目に付かなくて無難であろう」
　知念院主は言いながら、魁の膝の上にいる空に笑顔を向け、そばの棚から菓子鉢を取り、くるみを盆の上に置いた。
「わしが与えてもさわらぬか」
「空、頂くように」
　空は魁をみてくるみに近づいた。五、六個取るとサッと戻ってきて、魁に渡すのだった。
「ほう、よいしつけをしておるな」

その間に執事の良知が魁と小助の前に小さな陶器の器を置いた。かすかに甘い香りがする。
　知念がジッと魁をみて、
「それを口に含んでみよ。何か分かるか」
　二人はソッと指先で口に入れた。上品な甘みだ。こんな物をいままで口にしたことはない。
「恐れながら、甘草ではなかと」
「さすがじゃ。それが甘草なのだよ。ある所から手に入れたが微量でな。なめるほどしかありはせんのじゃ。器の底にこびりつくほどなのによく分かった。円城寺様とは昔からご縁があり此度薬草園のことで相談をうけての」
　　そういう知念と良知も、ただの僧とも思えぬ雰囲気をただよわせていた。円城寺家とは代々の住職とのつながりがあったのだという。山衛の頃から主だった寺に庇護を与え、親交を深めていたらしい。戦国の世にあっては持ちつ持たれつの意味合いもあったのだろう。
「わし達はたいていの物は手に入るが、甘草だけは思うにまかせぬ。以前から甲斐の国に自生するという甘草を求め、この寺からも三人ばかり（草）として甲斐に赴かせておるが、今だ沙汰なしじゃ」
　ある時、身延山の修行僧が山々を歩くうち、塩山から甲斐の山峡のあたりで深く入り過ぎ、風雨などに叩かれ疲労のため動けなくなってしまった。
「拙僧の命もこれまで……か」
と御仏にも見放されたと覚悟を決め、石の上に仰臥し、最後を迎えようと目を閉じていた。
　　どのくらいの時が過ぎたのか。
　　僧の意識は薄れ始めていた。
　その時、品のいい老人とその使用人と思われる男が現れ、使用人の背負う籠の中に入っていた草を少し取り出し、老人は手で揉み僧侶の口に押し込んだのだという。しばらくして僧侶は気がついた。口中の草を取り出すとほのかな甘い香りがした。僧侶の生命が救われたのは、その草が薬用として作用したのと、甘味が疲労していた体に効果を発揮したのではないかと思われる。そばには握り飯と水の入った竹筒が置いてあり、更に麓に下る道筋の書いてある料紙も添えてあった。僧は以後、その草を枯れても所持していたのだとか。
「身延に参籠した先々代の住持が法話のなかでそんな話を聞いて帰ってきたが、それが甘草、という事を知る者はまだ少なかったのじゃ。しかし、先代が甘草に興味を持ち、かすかな伝を頼って調べ始めたが、うまくいかんかった。そこへ薬草園の話が起こりその方らとの縁となり、此度の仕儀とあいなったのよ」
　　かって市蔵が数回甲斐に赴き探った結果、塩山のあたりに群生している事も判明した。魁はここで知ったことだが、市蔵は目を悪くしていたらしい。市蔵をもってしても叶わなかったこの件が、こうして魁に引き継がれたのであった。
　　甘味といえば柿の実の熟したものくらいしかなかった時代、舌の超えた上流階級の人達にとって、甘草は垂涎の代物であったに違いないが、薬草としての部分が必要なのである。
「この寺はかなり広く知られている寺じゃ。その方らは寺の使用人、ということにして寺独自の通行手形を与える。これがあればおおよそのことに使える。関所などには寺の息のかかった者もおる筈だから、さわりはないが、他国では気をつかえ。この寺に好意的な人物ばかりとは限らん

からな」

　知念や良知などの過去にも絡むということなのだろうか。

六

　翌朝の勤行は壮観を極めた。先の養剰院以上の数の僧が存在した。魁と小助は空を外に置いて、隅の方にかしこまった。二人の頭に数珠が触れた。
「難を退けよ。無に徹せよ」
見上げると、知念の院主としての穏やかな笑みがあった。
再び爺の世話で朝餉をとった。
「腹いっぱい食っていけ」
　といい、にぎり飯も持たせてもらい挨拶をして、庫裏を辞した。
　　先に外に飛び出した小助が大きな声で、すごいよ、と言う。見た魁も驚いた。広大な庭はさながら武道場となり、あちこちでそれぞれ刀や手槍、更には鎖鎌、弓、木刀などを持ち鍛練に励んでいる。
　まぎれもない。さき程まで勤行の席にいた僧達であった。
「そうか。ここは僧兵の武闘集団の寺でもあるのだ」
「驚くのは早いぞ。どこかでこの者達の力が助けになる時もあろう。だが他言はするな」
　いつの間にか、良知が後に立っていた。
　円城寺家と宝樹寺のつながりを、おぼろに理解し始めた魁であり、いつの間にかその組織に組み込まれたことを知った。
　門番の喜八が二人を見ると嬉しそうに寄ってきて、
「朝早くから何回も見回ったが、不審な者はおらんかった。しかしそんな奴だ、いずれ現れるだろうよ。心して行けよ」
　と、目立たぬ所にある裏門へ案内した。

　八王子の宿場町は旅人の出立でごった返していた。魁と小助はここでも離れて軒下を歩いた。何にでも興味をもつ空を、無理やり籠に押し込めた。顔など出して周りの騒ぎになったりしたらおおごとだ。どこに目があるか知れたものではない。もちろん、又三のこともあるが、宝樹時を出た時から忍びの仕事ははじまっているとみなければならないのだ。
　西に向かって歩いているから、いつも見るようになった山々が今朝も正面に聳えている。
　街道に出るまではそれでも道は曲がりくねっていた。
　八王子の宿は十五宿あり、本宿は横山宿・八日市宿であり他の十三宿は加宿として、伝馬などの補助的な部分が多かった。人馬継立の問屋場も横山宿と八日市宿の二ヵ所で、一ヵ月ごとに交代で行い、本陣・脇本陣も両宿にあり宿場の中心として栄えていた。両宿は市開設の特権も与えられ、運上金も納めたが、市場を利用する商人からは庭銭などを集めた。他の宿からも市開設の願いが出されるなど紛争も絶えなかったのである。
「八王子は寺が多い土地だな。武田家滅亡後、武田家にゆかりのある人達が祀られているからだ

ろう」
　やっと街道筋に出た。
　追分に向かう途中、「大久保石見守長安陣屋跡」の横を通った。その一体が陣屋のあったところである。
　大久保長安は能役者だったが、武田氏に取り立てられ、金山発掘など武田氏に貢献したが、武田氏滅亡後は徳川家の重臣にその才能を見いだされ、代官頭として財政・産業治山治水、そして鉱山開発などで徳川家臣団として活躍をした。八王子宿の建設と発展に格別の貢献をしたが、長安死後、大久保家は失脚し、詳細は不明となっている。
「戦国時代も皆、苦労したんだなー。でも俺たちだって生きるのに一生懸命だよな。小助、そう思わないか」
「うんそうだよね。いつだって怖い思いしてるもの」
　追分の町に着いた。ここで道は二つに分かれ右が陣馬街道、左が甲州道街だ。
　その二股のあたりに八王子千人同心という幕府一家臣団の組織に幕府から貸与された拝領屋敷や組やしきが、黒い板塀に囲まれて見えてきた。
　千人同心の成り立ちは、甲斐武田氏の小人頭に率いられた軍事集団だった。天正一〇年（一五八二）武田氏が滅び、徳川家康の配下となった時、甲武国境を警備する目的で八王子に移された。最初、五〇〇人在した。その後、戦いなどに備え、諸家の浪人などが入り千人の組織となった。八王子は戦国時代には、後北条氏の支城滝山城・八王子城があり、北条氏照が支配した中心地だった。後北条氏滅亡後は残党が跳梁し、警備と不慮に備えるため駐屯した。その後、徳川幕府の安定と共に幕府から命じられる公務を勤める時以外は、農民と同じ生活をしていた。
　魁たちが、宝樹寺の良知執事から、千人同心の話を聞かされ、にわかの知識でこの場に佇んでいた頃、この集団は徳川の歴代の将軍が京に上る際のお供（上洛供奉）や、日光東照宮へ参詣する供、警備などの働きのなかにあったと思われる。
　　八王子千人同心は、明治維新により解体するまで二七八年間。幾多の戦場にも出陣し徳川の家臣として働いたその功績を今に伝えている。
「俺たちはその人達が最初に守ったといわれる、小仏峠に近づいているんだな」
「これから先は山道だ。峠はいくつもあるし、とにかく道に迷わずにいくのが大事だ。空を籠から出そう。空の方がこれからは強いよ」
　二人と一匹はいつの間にか、一体となって歩き出した。
　一番よろこんだのはもちろん空である。魁や小助の肩に飛び乗ったり、時に二人の後先になり歩く。それでも時々立ち止まってあたりを睥睨する様はいっぱしの仕事人の格好だった。空も飛騨を出てから少し成長したようである。
　日が昇ってきた。しばらく雨が降っていないせいか、歩くたび土埃がたつ。二人共、宝樹寺の爺から草鞋を二足ずつ渡されていた。それぞれ腰に下げ握り飯は小助が風呂敷に包み背負っていた。
「小助、これからは山道だ。どこでどんな奴に出会うかわからない。争いになり、もしはぐれてしまった時はどうするか。そこで、決めておきたいのだが……、そうなった場合、山なら目立つ大木、その付近で名のある寺とか、宿場ならこれも大きな宿のそばで待つ、というのはどうだい

」
「うんいいよ。何でも一番の所だね。わかりやすくていいよ」
「良知執事から甲州金を受け取った。あとの昼餉の時お前にも渡す」
　円城寺家の家老、望月長門は印伝の袋を渡しながら、
「小粒金はすべての所で使用できるが、小粒ゆえ用心して使うように」
そう言っていた。二種類を使い分けねばならない。
小粒といっても不揃いであるから、大きめのものは刃物で切って、なるべく倹約して使用するということでもある。
「小助、そろそろ初めての関所、駒木野に近くなってきたぞ。別に構えることはないからな」
　戦国時代には小仏峠に設けられていた関所だが、人里から離れていたので天正年間（一五七三）の頃、麓の駒木野に移されたのである。
　この関所を過ぎれば小仏宿だが、駒木野宿と小仏宿は相宿で、一ヶ月のうち半月ずつを継ぎたてた（半月毎の営業）。
　甲州街道、武蔵の国最後の宿場でもあった。
「関所番が五人もいるよ」
　入り口の所には旅人が七人ほど順番を待っていた。
小助は空を肩に乗せ魁の後ろにくっつき、役人の通行手形の検めを緊張の体でながめていた。
　そして……、いよいよ魁達の番になったのである

　　甲斐の国へ・は後編に続きます。

作者